資料　法学部史

戦時下の同志社と私

――田畑忍先生に聞く(一)

司　会　西田　毅
出席者　脇　圭平、上田健二
　　伊藤弥彦、深田三徳
　　岩野英夫、富沢　克
日時・場所　一九七八(昭和五三)年七月二七日
　　午後一時三十分、光塩館第二共同研究室

西田（司会）「田畑忍先生にお聞きする会」をはじめたいと存じます。最初に、この企画をもつにいたったいきさつについて、一言、御説明させていただきたいと思います。実は、この春（一九七八年）、藤倉法学部長から、名誉教授の諸先生方から、法学部の過去の歴史について、いろいろお話をうかがいたいと思っている、ついては、私に、田畑先生のインタビューを担当してもらえまいかという相談をうけました。

御承知のように、同志社では、目下、社史史料編集所を中心に、『同志社百年史』の刊行の準備が進められております。私もたまたま分担執筆者の一人として、この仕事に参加する過程で思ったことなのでありますが、こうした「正史」の編纂も無論結構ではあるが、それとは別に、学部が主体になって、それぞれの学部史をまとめることも意義があるのではないかということであります。

つまり、同志社が、その歴史において、少なくとも大正九年に、大学令にもとづく大学としての歩みを開始して以来このかた、その研究教育上の機能は、学部の活動を中心に展開されてきたことを考えますと、もっと各学部が、積極的に、それぞれの研究、教育、人事などの記録や資料の蓄積に努め、また、特定個人にたいする「オーラルヒストリー」などを試みてもいいのではないかという問題であります。機構的には、当然、社史史料編集所あたりがセンターとなって、こうした作業のイニシアティヴをとるべきなのでありましょうが、これまで同志社に

は、寡聞にしてこの種の試みが実行にうつされたのをきかないのであります。

このような営為を通して、「正史」が往々にして陥りやすい欠点、すなわち個々の人物の証言やエピソードなど秘史稗史の類に属すると考えられる記録が「正史」的価値基準からすれば、まま消極的な評価を下されるところからくる歴史の複雑で微妙な相貌の把握の欠除といった難点を少しでも補完できるのではないか、そうして、長い眼でみて、こうした作業の蓄積が、ひいては、「学校史」をより豊かなものにする途につながるのではないだろうか。ちょうどこのようなことを漫然と考えておりましたときに、今回のお話が出てまいりました。

私がインタビュアーとして、はたして資格があるかどうか多分に疑問はありますが、その点の疑念よりも、これは、田畑先生御自身が直接に語られた過去の同志社大学法学部の歴史をいわば第一次史料として保存するいい機会であるという思いが先行いたしまして実は、進んでお引き受けしたような次第でございます。

なお、先生のこれまでの御活躍ぶりから申しまして、話題は、必ずしも、法学部と田畑先生というこの会の本来の趣旨に限定されることなく、広く、戦前・戦時下・そうして戦後の同志社大学と時局の問題にまで、ひろがってゆくものと予想されます。

したがって、あえて、「ヒアリング」の対象を狭く限定する必要もなかろうかと思われますので御出席の方々の御自由な御発言をお願いいたします。

田畑先生は、同志社の法学部が、戦前の「黄金時代」にあったといわれております海老名総長の時代に、予科から大学へと進まれ、当時の学内外にみなぎる大正デモクラシーの知的状況の中で、学生生活を過ごされました。学生時代は、恒藤恭、今中次麿、中島重、高木庄太郎諸教授の学問的影響をうけられ、とくに、中島重教授の御薫陶の下に研究生活にお入りになられました。

一九二七（昭和二）年の大学御卒業後、直ちに法学部に奉職なさいまして、政治学と憲法学の御研究に従事されるわけでありますが、その間、秋山哲治先生の表現をお借りしますと、まさに、「険阻多難な茨の途」（『同志社九十年小史』）の一九三〇年代を経て、あの終戦を迎えておられます。そこで、今日はヒアリングの第一回目といたしまして、昭和二年の法学部助手御就任のころから終戦までの同志社大学法学部と田畑先生という題でお話をうけたまわりたいと存じます。

田畑　今日は、第一回としまして、「戦前の同志社大学法学部」について、私の経験に即して、お話いたしたいと思います。

戦時下の同志社と私

法学部は、最初、政治学科と、経済学科の二学科だったのですが、私たちの学生のころには政治学科と法律学科、経済学科の三学科になっていました。そして、戦時になって昭和十九年に、法学部は法経学部と改称し、これが戦後、新制大学の発足に伴って、経済学部が分離すると同時に、政治、法律の二学科を含む法学部になるまで継続したわけであります。

私は昭和二年に政治学科を卒業しまして、政治学専攻の法学部助手に採用されました。憲法を併わせて担当するようになりましたのは数年後のことですが、これは私の希望によるのではなく、教授会の命令に従っただけであります。

学部三年のときと卒業した年度の学部長は、金融論の黒川芳蔵先生でありました。学部一年のときは憲法と法理学の中島重先生、二年のときは政治学の今中次麿先生が学部長でありました。今中先生は私たちの卒業直前に東大の農学部に赴任され、のちに、九大の法学部に転任されたのです。岩倉の土地問題にからんで反動化した理事会に対して、法学部教授のうち十数名の者が対決を始めたのが、同じく昭和二年であります。

昭和三年になりまして、財政学の和田武教授が部長のときに、海老名総長兼学長が、有終館炎上の責任を負って辞任されました。また学生新聞の社説で理事を「彼ら醜類は」と呼んで攻撃した民法の能勢克男教授、高橋貞三講師（行政法）、高橋信司

講師（比較憲法・政治史）の三教授が、理事会、特に理事の三宅驥一博士（東大教授、生物学者）を激怒させた結果、退職するということになりました。ついで、社会的キリスト教の主唱者であった中島重先生が、連合教授会？の決議に従って解任されたころから、法学部教授会は理事会派と反理事会派に分裂することになりました。

昭和四年、この紛争解決のために黒川学部長の再登場となり、また同年、大工原銀次郎農学博士が総長兼学長に就任されました。このお二人の努力、ことに大工原総長の公平な大学行政により、ようやく事態の収拾を見ました。昭和五、六年は経済原論の古屋美貞教授、昭和七、八年は社会思想史の林要教授が学部長になりました。

この大工原時代は、私たちが極めて平穏に研究生活を享受することのできた時代であります。ところが、昭和九年に大工原先生が病没され、後任に湯浅八郎理学博士が就任されますと、学部内の紛争がにわかに激化しました。それはアメリカ流儀の湯浅総長の学内行政が公平でなく、一方的管理的であり、それまでの理事会派が反総長派になり、逆に反理事会派が総長側になり、その上教授会自治が全く失われるにいたったからであります。

学部長は統計学の宗藤圭三教授が九年から十年にかけて在任

し、十一年と十二年は国際公法の河原政勝教授が法学部長でありました。この三年の間に、一部教授団の理事会に対する抗争が、教授会内部のドロ試合的様相を呈するように変貌して、表面的には複雑に思想問題がからんで参りました。そのきっかけは、総長が民法専攻の野村重臣助教授と経済原論の古屋美貞教授をそのプライベートな問題に関するうわさを取り上げて罷免した事件であります。ことに野村君については、「学術、人物ともに大学教授たるに適せず」という仰々しい理由づけがありまして、野村君を非常に激昂させたのであります。なお、野村君の国粋主義的な傾向の論文を「学問的でない」として、編集委員の松山斌君（交通論・保険論）が『同志社論叢』に掲載しなかったことが、この事件の一つの前提になっていたわけであります。

野村君はそこで報復的に、「林要教授はマルキストである」というパンフレットを学内外に配布したのです。その背後の右翼団体がこの段階で介入することになり、総長は林要先生を擁護できなくなりまして、林先生は依願退職ということになったのです。

ついで野村君は、「田畑憲法はレーニン憲法である」という趣旨のパンフレットを出して、私の二著、一つは『帝国憲法逐条要義』（昭和八年・九年）、もう一つは『憲法学の基礎理論』（昭和十一年）に対して攻撃を加えました。そのため、ある理事と右翼の若松華瑤という京都方面の先年亡くなったボス、この二氏に対決させられたこともありました。彼らは怪文書を次次に出して、総長と反対派の教授に対する非難攻撃を繰り返しました。そのピークがいわゆる上申事件です。すなわち反総長派の教授若干がパンフレットで問題にした私と、具島兼三郎助教授、林信雄助教授、宗藤圭三教授を罷免すべしとする上申書を総長に提出しました。彼らは上申組、他方は被上申組ということになったのであります。

総長は山下彬麿弁護士及び吉田悦蔵理事とじっ懇の憲兵司令官中島今朝吾中将に助けを求め、彼を仲裁役としてその意見を聞き、けんか両成敗という形をとり、上申組二名、被上申組二名を馘首し、各一名を休職処分にしました。宗藤教授等は処分されず、私と河原先生は休職処分になりました。特に私には随神の道の筧克彦東大教授への師事と国民精神文化研究所（昭和七年八月創設）で勉強し直すようにという「洗脳」条件が付けられていました。私は総長に、それは命令ですかアドバイスですかとただしましたところ、アドバイスだということでありました。私はこのいやなアドバイスには絶対に従わず、ただ東京に一年間滞在してアテネフランセでフランス語を勉強し、慶応の図書館にときどき行くだけで、大部分の時間を論文執筆に費

やしました。そのときの所産が、『帝国憲法条義』（昭和十三年出版）と、それから加藤弘之研究の諸論文、政治概念関係の諸論文、「憲法秩序論」と憲法の基本問題に関する論考若干であります。

先日亡くなりました民法の青山道夫君が、東京で交わったただ一人の同志社外の友人でありました。清水幾太郎君に散歩の途中で出会って、彼の家に立ち寄ったこともございます。彼の家の客間にナポレオンの肖像画が掛けてあるので驚いたことを憶えています。終始世話になったのは牧師の岩井文男君ですが、岡本清一君や、大江直吉君が訪ねてきてくれたことがあります。同じ同潤会アパート在住の安部磯雄先生が暴漢に襲われたのが、十三年の一月であります。私は昭和十二年から昭和十三年にかけての一年半の休職の後に、昭和十三年九月、新任の牧野虎次総長の手で河原教授と一緒にやっと復帰できました。湯浅博士は左右からの攻撃に耐えることができなくなって、すでに十二年末に辞職を余儀なくされていました。

帰学後半年、私は助手に残りまして十三年目で教授になりました。そのときは、法学部長黒川先生の努力で、法学部内の空気はかなりよくなっていました、然しさらに教授会の融和と自治を回復することが絶対に必要ですから、私はそのためにできるかぎりの努力をいたしました。これが昭和十三年、十四年、

十五年の頃であります。講師であった田村徳治先生、同じく講師であった民法の木村健助先生などの協力も願って、北原春雄君（民法）、南山俊翰君（民法）、岡田良夫君（政治学史）等を助手に残ってもらうことができるようになったのも、自治回復と融和の一つの成果だったと思います。そのころの部長は、十四年が松山斌君、十五年、十六年が松井七郎氏でありました。なお十六年になりまして、田村先生にお願いして専任教授になっていただいたというようなしだいです。

次に、最初の法学部長のときの経験についてお話しましょう。私が第一回の法学部長になりましたのは、昭和十七年四月でございまして、松井さんの後であります。昭和十八年に文化研究所ができました、その前年であります。法学部長になって私がまず考えました事は、湯浅総長のときにつくられた御真影教員宿直制度の廃止であります。すなわち教員の日直・宿直制を廃めて、これを事務職員のみに限定しようということでありました。そこで、総長を議長とする全同志社の部長校長会というのがいまもありますが、その校長部長会でこの提案をいたしました。うまくいくかどうかは全く予期しなかったのですが、たちまち牧野議長の激怒を買いました。宿直は事務であって、教授・研究者は事務に煩わされずに学問研究に打ち込むことが義務づけられている、現にどこの大学でも教授に宿直をやらせてい

るような所はない、部長は事務職であるから、法学部で必要なら、宿直は全部部長が引き受けてもよい、と言ったわけですから、時節がら危険な提案だったわけです。牧野総長の怒りもさることながら、役職事務職員が悪く思うのは自然だったと言えましょう。憲兵隊に訴えてやるぞ、という脅しを言った人もありました。

ところが意外にも、中学校長の野村海軍予備役大佐――この方は数学を担任されておったのですが、永野修身軍令部総長と海軍兵学校で同級だったという、その野村さんが、田畑さんの提案は正論だ、私は賛成する、そう決めようじゃないか、しかし事務責任者は、部長も校長も宿直をやる必要はありませんよ、という発言をしました。戦時における軍人の賛成意見は威力があるもので賛成者が忽ち多くなり、総長も機嫌(きげん)が直って、そのように決まってしまったわけであります。時局に迎合した教員宿直制度を戦争の真最中に廃止することができて、私は実に愉快でした。私の長い同志社在職中のいちばん愉快だったことはこの経験であります。ところが、憲兵はやってくるかどうか、やってくれば説得する自信も十分に持って待ち構えておったのですが、ついに現れなかったのは当然と言えましょう。

若松専務理事ともよく意見の相違で争いました。いつも私はイエスマンではなくて、常にノーマンでありました。その一例を申しますと、若松さんは、教授を博士の学位や業績を持つ良教授としからざる教授とに分けて、「良」教授には増俸して優遇するという懸案を持っておられ、それを執拗に強調されますので、私は若松さんが知事をしていたことを知っていたものですから、学位を持つ知事や局長があっても、その増俸をしないでしょう、学位は問題ではないし、主観的な「良不良」を問わず待遇を同じくしなければ大学ではないんだ、と反ばくいたしました。彼はそれ以来そのことを言わなくなっただけでなく、かえって私を大いに認めるようになりました。総長も同様でありました。

もう一度牧野総長を激怒させたことがございます。それは学生寮であるアーモスト館から、戦時に便乗して学生を追い出し、本部が占領したということがありました。それだけでなく、教場等は石炭不足でストーブは焚かない、しかもアーモスト館ではセントラルヒーティングを続けていたものですから、それに対してプロテストしたわけです。それで、牧野先生は非常に怒りまして、やはり部長校長会の席上でありましたが、牧野先生は持っていた万年筆を落とし、顔を赤くしてブルブル震えて怒りました。しかし先生は、陰では私の発言についてもほめていらしたそうです。しかし、この私のプロテストは実現しませんでした。

第二に、私は、学生諸君というよりも、特に学友会の委員長をしておりました、いま判事をしている滝川春雄君の要請にこたえて、直ちに電車通り（今出川通）に接近した教場の致遠館の窓に防音の設備をすることに踏みきって、これを二重窓にする決意をいたしました。これは予算が伴うことですから、敏腕で癇癪（かんしゃく）の強い宮沢会計課長に電話をいたしました。宮沢氏が渋るのは無理ではないと思ったのですが、即決を要しますので、「命令だからやりなさい」と言ってガチャリと電話を切りますと、まことに効果てきめんで、致遠館の防音設備をすることができました。おかげで講義をするほうも聴くほうも楽になりました。また宮沢氏とも懇意になりました。

第三は、二度の法学部長を勤めて成功されていました黒川先生が、非常時の大学学長として、前年から精励されていたのですが、学生の軍事教練の大隊長に神学部の本宮老先生を任命され、有賀教授、桜井教授、魚木教授、里井教授等を中隊長に当ててておりました。しかし、これはいかにもこっけいでもあり、学生のためにも、教授のためにも、学校のためにもよくないことだと思ったのです。実は簡単に全部学生を当てればよいので、文部省の通達を見ても、学生または教授とあるので、京大もどこの国立大学も、特に当時時局便乗の立命館大学でさえも、全部学生にやらせておったわけです。同志社でも当然にそうあるべきだというのが私の主張だったのです。そのように黒川学長に直言し、毎日学長室にデモをかけました。然し、なかなか承知されない。しまいには、私の顔を見ると別の入り口からすっと逃げていかれるようになりました。そこで私は東京の諸大学の実態をも調べたいと考えて出張要求をしたのですが、学長はその必要がないということで旅費を出してくれない。しかたなく、私は自腹を切って東京に行き、早稲田、中央、慶応、明治、立教等、諸大学の総長または当局を歴訪しました。これらのどの大学でも、もちろん同志社大学のようなことはやっておりません。帰学してそのことを学長に報告しましたが、それでも黒川学長は、その同志社の迎合的なやり方をベストと考えて、正論を聞こうとはされませんでした。

しかし、このことで東京の諸大学の当局の方々に会って、私学の経営についての意見も聞くことができたのは収穫でした。ことに早稲田では、中村宗雄教授がちょうど総長室に来ておられ、同教授との交際は、そのとき以来戦後に及んだしだいです。戦後中村教授とは私学国庫助成運動でも協力しました。

第四に、法学部長として私のしましたことは、滝川春雄君を刑法の助手に、熊谷開作君を日本法制史の助手に、恒藤武二君を経済哲学の助手になってもらうということで、幸い教授会でそのように決めることができました。それから、同じクラスに

藤井健二君がいましたが、彼は大学院に進学して荻生徂徠の勉強をしたいということでしたが、家が株屋さんですから、結局私が説得して彼は家業の萬成証券の経営者になりました。恒藤君は十九年に一たん同志社を退職して、戦後また帰学して専攻を法哲学に変更してもらったのです。滝川君は助手に採用早々、海軍の主計将校になりました。熊谷君は陸軍の幹部候補生になりましたが、二君ともに戦後無事に帰学しました。戦争の末期になって同志社を辞めた教授は、恒藤武二君のほかにも数名ございました。宗藤圭三教授、佐藤義雄教授、法学部ではその三人だったと思います。

第五は、長年にわたって法学部の専門学校兼任教授を教授会から締め出していました社会学の難波（紋吉）教授に対して、私はそれとのバランスをとって、公正を保つ必要上、法学部教授会出席を校長兼任中はしないよう、教授会の席上で要請し、さっそく退場してもらうということを決めたことがございます。難波さんは、戦後は、文部省による追放のため、専門学校長も辞めて、解除後復帰されるまで、法学部教授会に出席することがなかったのであります。

第六は、法学部長在任中の事件に、河原政勝教授の造言蜚語（ひご）罪事件というのがございました。それは河原先生が講義中に、アメリカ海軍の駆逐艦が瀬戸内海に侵入して日本の潜水艦を追い回している、という話をされたことが漏れて、中立売署が立件し、検事局で取り調べをしているという事件であります。河原夫人がスイス人であったために、スパイの嫌疑（けんぎ）をかけられたのであります。私はこれを河原先生から聞きますと、直ちに行動を起こし、その嫌疑を晴らすことにいたしました。早速、黒川学長と牧野総長に協力をお願いして、取り調べ担当の伏見検事を検事局に訪ねました。また、刑法担任の講師でありました中路判事にも協力をお願いして、不起訴にしてもらいました。おかげで、国際公法の教授を失わずに済んだわけであります。

それから、部長在任中に慶応大学の小泉信三塾長が来校されたことがありました。ちょうど私が福沢諭吉研究をしておりましたので、慶応の福沢研究者である富田正文氏や紺野和七氏とも知ることになりました。戦後、毎日新聞大阪本社講堂での慶応義塾主催の「福沢先生生誕記念講演会」で高橋誠一郎、丸山真男の両氏とともにその講師を依頼されることになったのは、それがきっかけであったろうと思います。

しかし、そのとき私は福沢先生を新島先生および内村鑑三先生と比較して、ことに千年先のことを考えていた内村先生に比べて、福沢先生は戦争好きで、百年先、千年先の見通しは持っていなかったのではないか、という批判をいたしました。これは、福沢先生絶対視の強い慶応の皆さんの感情を刺激したよう

でありました。

やはり在任中に海軍派遣の某海軍少将が来校して時局講演をしたことがございますが、講演の趣旨は、結局この戦争は無理だ、軍艦も無理な装備をしている、このままでは負けるほかない、というものでありました。また、当時、立命館大学では、外交史・政治史の田中直吉君を幹事とする公開の軍事講座がありまして、私も四手井中将、石原中将などの講演を聴きにまいりました。石原莞爾中将の「世界最終戦論」も、四手井中将の「戦争史論」も、酒井鎬次中将の「戦争論」も、ほとんどすべてが戦争否定論以外のものではありませんでした。その点私は大いに教えられるところがありました。また、それらの戦争論は私の政治学の構想に非常に役立ったように思います。それから、私が当時熱心に読んだたくさんの戦争論関係の図書の中に、岩波文庫本の『名将言行録』というのが数冊ございまして、これも大変役に立ったように思います。

話が前後しましたが、学部長一年の全力投球を終わった私は極度に疲労を感じ、微熱が出るようになりました。そこで十八年の四月に任期を終り、刑法の教授であった土井十二氏が後任で、十八年、十九年、二十年と、戦争が済んでからもしばらくその任にありました。私は部長を離れると、病室が空くのを待って近江八幡のサナトリウムに入院いたしました。そこに二カ

月ばかりおりまして、微熱が下がって帰ってまいったわけですが、その入院中に繰り上げ卒業の滝川君等の試験を病院の広い庭園でしたことを、いまでもなつかしく思い出します。

そのあと、しばらくして脊椎カリエスになりました。林整形外科の診療を受けるようになり、コルセットをはめなければならなくなりました。これはさきの微熱と関係があったかと思いますが、そのため私は労働奉仕に行くことができませんで、研究所での勉強と、病弱で学園に残ったわずかな学生諸君の小さなクラスのスクーリングを持つておりました。

戦争がだんだんひどくなりまして、家族を全部田舎（富山県福沢村）に疎開させ、私一人で自炊生活をしているうちに、戦争がおわるということになったのですが、家財の一部を富山へ送りまして、富山駅ですっかりそれを焼いてしまう結果になりました。本類は京都の東山の奥の母の家へ運んだんですが、あとで考えると運ぶ必要は些かもなかったわけです。それを運ぶ途中で失ったり、あるいは壕の中へ埋めておいて腐った本も相当ございます。終戦日は、私と民法の助教授になっていた南山俊幹君と私の家で一緒に迎えるということになったのです。

研究会は戦争中も続いておりまして、佐々木惣一先生の公法研究会、恒藤恭先生の法理学研究会、田村徳治先生の行政学研究会はずっと続いておりました。そのほか、佐々木先生は政道

学塾というのを戦争の途中から主宰されまして、私はそれにも参加していました。

なお研究所のことについて付け加えますと、昭和十八年、私が部長を辞めた年ですが、田村先生を所長とする同志社大学文化研究所が発足いたしました。これは田村先生と若松専務理事、――専務理事兼事務局長であったと思うのですが、その熱意によって創設されたもので、いまの研究所はそれの後身ということになるでしょう。文学部の園頼三教授（美学）が幹事になり、文学部の浜田與助教授（哲学）、神学部の魚木忠一教授（キリスト教教理史）、法学部では、もう亡くなった黒田謙一助教授（日本経済思想史）、現在経済学部教授の中島哲人講師（経済原論）が研究所員でした。所員の選択はすべて田村先生の独断です。学校が田村先生を所長に任命しまして、その田村先生の一存で所員を決めたわけであります。そういったことで、私は初め研究所に反対であり、所員にならんと言ったのですが、強引に田村先生がどうしてもなれと言う事で結局従ったわけであります。

そのころ同志社本部はアーモスト館にありましたが、研究所はそのアーモスト館の三階が当てられていました。所長事務はすべて園頼三先生が当たっておられ、田村先生はいっさいの事務を避けておられました。したがって、助手の仕事をする学生若干名は、園先生の手で決まったわけですが、その中に文学部の松山義則君（さきの学長）、末川先生令嬢の末川さん等がおられました。

松山君はあとで副手になって、戦争が済んでも研究所の仕事をされておったようでした。田村先生は、戦争を勝利させるような論文を書くようにという要望を、所員のことごとくにされましたが、そんな都合のよい論文などは絶対に書けるものではないわけです。ですが、先生は大まじめなんです。田村先生は多分それが可能なように錯覚されていたのでしょう。どうも少し変な感じがいたしました。大同社会の実現が田村先生の思想ですが、それに従って東亜共栄圏の理論づけをされただけではなくて、「天皇陛下万万歳の理論」というような論文も書いておられました。それをどこの本屋も出してくれないんです。参謀本部へ行って頼んだそうですが、そこでも出してくれない。それから戦争の担い手でありました徳富蘇峰大先輩と研究所との交渉がありまして、田村先生、園先生、浜田先生、魚木さんなどは、よく熱海参りをされておったようであります。私は反発して、一度もそれに加わりませんでした。その当時私は、加藤弘之、福沢諭吉、有賀長雄、穂積八束、上杉慎吉、井上毅、伊東巳代治、金子堅太郎、伊藤博文、小野梓、福地桜痴、陸羯南等の政治思想と、ヘーゲル、ルソー、カント等のヨーロッパ

の政治思想史の勉強をしておったのであります。カリエスを患っておりましたから、コルセットをはめていて、非常に窮屈な毎日でした。ことに寒いときは困ったんですが、腹ばいになって、手袋をはめて、毛筆で原稿を書いておりました。その原稿の一部はまだ残っていると思いますが、そういう戦争中の研究生活でございました。

大学研究所と田村徳治の思想

西田　大学研究所のことですが、これは最初、大学研究所という名前で発足したのですか。それとも最初は文化研究所で、それから大学研究所というようになったんでしょうか。

田畑　初め研究所というのはなかったんです。戦争で大学が小さくなってるでしょ。つぶれるかもしれんという心配があったわけです。大学はつぶれても何かの形で残そうというような考えだったようです。研究所で所員だけは続いておれるようにということだったらしいです。

西田　大東亜の文化を特に研究するという意図があったんでしょうか、田村先生の場合。

田畑　田村先生は大東亜主義でした。それと東京の筧克彦博士にちょっと似たところがありました。筧さんも神職の家だそうですが、田村先生も実家がそうなんです。そういう神道的な考えからきているのでしょうか。しかし、田村先生のは右翼や軍部とは違った、明らかに自由主義を基調としたものでした。

西田　戦争中の『同志社論叢』に田村先生がいくつか論文を書いておられます。ちょっと昨日調べてみたんですけれども、たとえば「東洋文化と西洋文化」、「大東亜共栄圏の構想について」とか……。昭和十六年から二十二年までこちらにおられてその後関西学院へ行かれたんですね。

田畑　昭和二十二年にパージなんです。学内の審査では、田村先生だけがパージになったんです。審査委員長は宗藤圭三教授です。先生はそれが非常に不服だったようですが、どうしようもない。東亜共栄圏の論文がいくつかあるでしょ。ですから歴然としているんです。

西田　これは周知の事実ですが、田村先生が京大をお辞めになったのは昭和八年で、滝川事件が起因になっています。京大事件当時の大学自治擁護のために、文部権力に抵抗された方が、昭和十六、七年のころには大東亜共栄圏の研究に関心を持たれるんですね。

田畑　その大東亜共栄圏の思想ですけれども、権力迎合の考えからきているんではないんです。それと離れて、それが必要だという考えでしょ。それは軍部がそういう政策をとっているからというのではなしに、先生の神道的な思想そのものが大同

社会の実現ということでしょ。つまり大同社会のある形のものが東亜共栄圏だというふうに考えられたのでしょう。だからそこは先生の思想とは矛盾しないわけです。しかもその社会において個人の自由は尊重する。学問の自由、思想の自由も、皆尊重するという考えです。ですから、政府や右翼の考えとは違うんです。

西田　学外のいわゆる行動右翼とのつながりというのはいっさいなかったんですか。

田畑　それはないですね。しかし、そういう者に対する同情的な気持はあったでしょうね。同時に、コンミュニズムに対する同情的な気持もあったでしょう。そこは思想の自由とか学問の自由の考えが強いですから。だから、ほかの右翼の人の立場とは全然違うと思います。京大を辞めた七人の方々の中では、先生は確かに飛び離れています。しかし、ほかの方々がやはり田村先生を尊重していました。末川さんにしても、滝川さんにしても、あるいは恒藤先生にしても。それは一面、田村先生が非常に徹底して自由主義の考えを持っておられた秀才だということによるのではないかと思います。大学の自治についても、強い信念を持っておられました。だから、法学部の教授会自治を回復できたのは、一つは田村先生のおかげだというふうに思っています。もちろん黒川法学部長の功績もあります。

ただ非常にわからんのは、たとえば「天皇陛下万々歳の理論」です。まじめにそう言うんですからね。先生は一面非常に論理的なんですよ。一途に論理の追究です。概念をきちっと立てていって整然としているんです。ところが俄かにまるで違ったことを言うんですね。先生の本にもありますけれども、「これをすらりと解けば……」といって、〝すらり〟ということばをよく使うんです。実にすらっと変わっちゃうんです。（笑）非常な飛躍をされるんです。

西田　吉富重夫さんの「田村徳治行政学の解説」によりますと、非常に哲学的であるという評価ですね。

田畑　対象論的なんです。言葉なんかでも、普通に使われている言葉は、先生は使わないんです。それを間違っていると批判して、自分で言葉を作っていくわけです。だから普通で使われている用語とは概念がちがう。そして整然とした格子図式に填めてゆくという方法論の社会史観・大同史観なんですよ。

西田　独墺系の行政学とも違うし、もちろんアメリカの行政学とも違う田村先生独自の行政学の体系を目指されていたようですね。

田畑　行政哲学みたいな線です。行政学というより行政哲学です。東大では蠟山さんがやっておられたでしょ。蠟山さんは実証的ですが、田村先生は思弁的です。哲学的というより思弁

的です。

脇　そういう学問の系統は、吉富さんにもありますし、ある意味では長浜さんにまでつながっている感じですね。

田畑　いや、長浜君にはつながってないですね。

脇　直接の子弟関係はないんですが、ただそういう大変思弁的な行政学ですね。

田畑　田村先生と同型の思弁的じゃないでしょ。

脇　いや、思弁的ですね。

田畑　思弁的ですか。然し論理はないですよ。（笑）田村先生は論理がありますけど、長浜君はその点無論理というか、何か変な論理ですよ。私は一度公安条例の事で討論した事があるんですが、変でしたね。（笑）公安条例は違憲だ、しかし内容はよい、だが反対だ、というんですからね。しかし朗々とした雄弁でしたね。

脇　子弟関係は直接ありませんね。

田畑　ありません。吉富君は、初めは田村先生に師事していたのですよ。ところがあとで変わっています。それから、一円一億君がそうですね。同志社では小野哲君がそうです。田村先生の思弁主義的論理の方法論というのは、当時の若い人に魅力があったんでしょうね。だから田村ファンはかなり多かったですよ。八木鉄男君も最初は田村哲学だったんでしょ。吉富重夫君は途中で恒藤恭先生の方法論に変わってますね。八木鉄男君も同様でしょう。

西田　子弟関係でいくと田村先生は佐々木先生の門弟になられるわけですか。

田畑　そうですね。概念をきちっと立てていくというところは佐々木先生の行き方ですね。それが田村先生の場合は過剰になっているんですよ。佐々木先生の場合は過剰ではない。普通というか正当というか……。ところが、田村先生の場合は事実と隔絶してわかりにくい、或いはわからない。

西田　たとえば、「理論行政学序論」「理論行政学概論」「理論行政学内論」（傍点引用者）となっているんですね、あの目次を見ますと。（註＝田村徳治『理論行政学』）

数次の同志社事件

脇　さっき『同志社九十年小史』の法学部のところを見てまして、大変なことが次から次へとあったんだなということを初めて発見したんですけど……。

田畑　その九十年史というのは余りよくないですね。八十年史の方がよい。

西田　しかし、まだ法学部史のところは面白く書けている方ですよ。私はそう思います。昭和四年の岩倉土地事件から昭和

十年ごろまで、法学部にとっては大変な時代だったわけですね。

田畑　あれは大工原さんがもっと生きておられて、大工原行政がもっと続いておれば、変な騒動にならなくて済んだと思います。私は、その責任はやはり湯浅八郎総長だろうと思うんです。湯浅先生はいい方ですが、アメリカ流ですから、大学自治ということがわかっていない。

アメリカの大学というのは総長独裁でしょ。学部は学部長独裁みたいな行き方をしているようですが、それなんですね。そして、日本のいわゆる大学自治を先生は全然理解されない、と言うよりもきらいです。教授の任免等々、すべて総長が独裁しなければならんという考えです。戦後再任のときにも、やはりそうでしたね。勤務評定をやると言いだしたんですから。勤評のはしりですが、それをみんなで反対してやらせなかったんですが、そういう独裁的な考え方が強く、また独裁的ですが、然し、その独裁がうまくない。そういう印象です。いい方なんですけどね、惜しいです。

伊藤　政治感覚がないということがあるんじゃないでしょうか。

田畑　勿論それはないですね。大工原さんは九大の総長をしておりましたが、九大の総長としては失敗してるんです。ところが、キリスト教であるというので同志社へ来られたんですが、吉野作造博士が特に懇意なんです。いちいち吉野さんに相談してやっておったということです。大学自治が大事だということを吉野さんはよく言って聞かせたんでしょう。これを金科玉条にして、吉野先生の意見に従ってやったんじゃないかと思います。

海老名弾正について

西田　ところで、田畑先生の学生時代と助手として法学部に残られたころの総長である海老名弾正先生を先生はどういうふうにごらんになっていますか。

田畑　海老名先生は大変な雄弁家で、みんな海老名先生を尊敬しておりました。海老名先生はデモクラシーの思想を持っておられて、吉野（作造）さんなんかも海老名先生に師事しておりました。中島先生もそうです。ところが、一面、戦争の好きな人で、安部磯雄先生と論争されたりしたことがあるようです。「戦争は人生でいちばん素晴らしいものだ」というような説教をするんですね。それで、昭和二年に私が残りましたときに、軍事教練があったでしょ。その査閲を総長自らやると言いだしたんです。それでみんな反対しまして、法学部では海老名門下の中島先生が反対の第一声を上げました。神学部では有賀鉄太郎教授が先頭に立って、掲示板にいろいろビラなんかを張った

りしました。そして海老名先生邸に押しかけていって反対をしたんです。ところが先生、なかなか聞かないんです。同志社はだらけているから、規律を立てるために査閲をやるんだ、と言う大義名分です。

私は初め黙っておったんですけれども、規律を立てるのは必要ですけれど査閲によらなくてもいいでしょう、ほかに方法があるじゃないですか、と言ったんです。その簡単な一言で、先生は瞬間言葉を失ってポカンとされていました。それから「田畑君は政治家じゃない。やっぱり学者だね」とかテレ隠しを言いましてね、査閲はしかしあっさりやめるということになりました。そういうことがありましたけれども、戦争が好きで軍隊が好きなんですよ。御生家がそもそも武士で、武士の血が流れておって、武士的な気持が強かったんでしょう。

西田　海老名さんが本郷教会から同志社の総長として来られたのが大正九年で、例の御大典のときの失火事件で辞められたのが昭和三年ですが、その間、海老名さんは随分と積極的にいろんな大学の改革に取り組んでおられますね。

田畑　ええ、特に法学部の教授陣の強化ですね。海老名先生とその前の原田助社長、その二人の総長が大学をよくされたのではないかと思います。

学生時代の恩師

脇　先生が大学時代には長谷部文雄氏がまだおられたんでしょ。

田畑　私は長谷部先生にじかには教わらなかったが、其の講座は経済原論第二部でした。純粋で偉いマルクス学者です。

脇　林要氏は？

田畑　林要先生には私は習ったんです。

西田　何を教えていらっしゃったんですか。

田畑　社会思想史、社会問題の担任でしたが、私たちのクラスで、私は独書講読で『コンムニスティッシェ　マニフェスト』を教わったんです。私のクラスに右翼に行った野村重臣君がいたんですが、そういう本を習ったわけですから、「林要はマルキストである」というのは彼がよく知って書いたわけです。

西田　それであとでやられたわけですか。

田畑　そうなんです。弁解のしようも一寸なかったでしょう。然し、本当を言えば、湯浅先生は総長として林先生を絶対に守らなければならなかったと思います。ところが守れない。あるいは守れなかった。

脇　林さんが自伝風のエッセイを書いてますね。

田畑　自叙伝のようなものでしょ。

脇　『おのれ・あの人・この人――サンチョ・パンサ回想録』ですね。それから河野密もいたんですか。

田畑　ええ、おられたんです。河野先生は刑法でした。私は、講義は判事の中路先生に聴いたんですが、試験の採点は河野先生にしてもらったんです。

脇　この人はあまり長くなかったんですね。

田畑　ええ、長くありませんでした。辞めて、社会民衆党ができて社会民衆党へ行った。そして国会議員になられたんです。

中島重の辞任

西田　昭和四年の岩倉土地購入問題事件で中島（重）先生は辞められたんですが、その辺のところをもう少しコメントしていただけませんか。

田畑　一つは、海老名先生が辞められて、中島先生は海老名先生に殉じたような形になったと思います。

西田　それで、そのあとすぐ中島先生は関西学院にいらしたんですか。

田畑　一年弱ぐらいの期間があったかもしれませんね。あるいは案外早かったかもしれません。連合教授会で中島先生を糾弾して、罷免にするように決議をしたんだということです。だから文学部との連合教授会です。予科の教授会も一緒に入ったんじゃないかと思います。海老名先生の辞任が一原因です。本郷教会以後ずっと海老名先生は中島先生を非常に大事にされていましたから……。

それから、中島先生は社会的キリスト教を唱導されておったでしょ。しかしこれは神学部等オーソドックスな神学の敵なんですよ。その社会的キリスト教の思想は賀川先生からきているわけで、つまり異端です。だからキリスト教以外の思想に対するよりもむしろ厳しいんです。キリスト教の中の異端的な思想ですから。だから大塚教授とか古い神学の人たち、あるいは予科の南石福二郎という英語の先生、非常に熱心なクリスチャンですが、そういう人たちが中島先生を追い出さなければいかんというような考えになった（南石教授の告白）。だから法学部の中からではなくて、ほかの学部、殊にキリスト教関係の教授の反対で中島先生は辞めることになったんです。

脇　住谷悦治先生にもお習いになったわけですか。

田畑　ええ、住谷先生には、経済思想史の講義を受けたんです。経済学史ということになっていましたが、三年のときに『唯物史観より見たる経済学説史』という最初の先生の本が教科書で聴講したわけです。

脇　ついでにお聞きしたいんですが、住谷先生が同志社を辞められ松山に行かれたのは人民戦線事件ですか。

田畑　あれは共産党のシンパ事件で、学内の紛争とも無関係です。共産党の資金集めにだれかわからん人が来たのに寄附をされた。それが洩れたんですね。長谷部先生の場合もシンパ事件です。長谷部先生の妹さんが熱心なコンミュニストで、女子部の学生だったんです。その方もやめたんじゃないかと思います。長谷部先生、住谷先生、このお二人はそのような事情で相前後して辞めたんです。昭和八年の事です。

男女共学の実施

西田　長谷部さんの妹さんで思い出したんですけれども、男女共学を他大学に先駆けてやったのは同志社ですね。例の田辺繁子さん、あの人が第一号ですか。

田畑　いえ。私のクラスに、のちに野村重臣君の奥さんになった人ですが、盛口婦美さんという方がいました。いまもその方は生存されていて、ときどき会うことがございます。北海道で高等学校の先生をされていましたが、それを定年で辞めてのち京都在住です。野村君とは戦中に離婚されていました。

西田　法学部の場合、女子学生というのは何人ぐらいいたんですか。

田畑　正式には私のクラスの盛口婦美さんが第一号で、一人だけでした。第二号は田辺繁子さん等ですが、これは一年下で

す。その時英文科では加藤さださん等がいました。その以前に聴講生制度というのがありまして、木村和子という人がいました。駒井四郎君の兄嫁になった人なんですが、先年亡くなりました。それと高木庄太郎先生の妹の貞子さんが来ていました。恒藤恭先生の奥様も聴講に来ていらしたということです。その人たちが最初でしょう。それから正式な制度ができて盛口婦美さん、田辺繁子さん等です。あとにも余り多くはないんですが、そのあと、妻形一栄さんや、滝川君のクラスには上野星子さん等がいました。同期には、加藤小鶴さん、この方は心理学ですが、英文科には割合沢山いたのだと思います。

研究生活のスタートの頃

脇　昭和二年にご卒業になって、最初政治学だったというのは今日初めて伺ったんですけど……。

田畑　最初は政治史なんですよ。政治史を中心に、思想史も政治学もやれというようなことでした。政治史は高木庄太郎先生が担当されておったんですが、高木先生は昭和二年に病気で辞めたんです。その後をやるようにということだったんです。ところが、高橋信司君が比較憲法で残っていまして、政治史をやりたいと言うんで、高橋信司君が政治史をやるようになり、私は政治史から離れたんです。政治学、政治学史というような

ことになっておったところ、中島先生が関学へ行かれたものですから、憲法の教授がいなくなって、それで教授会で、あいつは法律のほうがいいんじゃないか、というようなことになったらしいんです。田村先生の行政学の講義を聴いているとき、これはクラスが小さいですから、いまのディスカッションメソッドのようなやり方なんです。で、そのとき、田村先生は「あんたは法律のほうがいいね」と、言っておられたんですが、ほかの方々もそういうふうに感じたんでしょう。私自身は憲法なんて毛頭考えてないんです。むしろ法律はすべてきらいだったんです。ところが、……政治学をやっていて、憲法を勉強する必要があるということも感じておりましたから、命令に従って憲法をやるようになりました。

西田　憲法学と政治学の関係ですが、いまと違って、当時は憲法の基本問題を明らかにしたり憲法の運用を究めるのが、政治学である、という認識が一般にありましたね。ですから、いまの感覚から言いますと、一人の研究者に、政治史も憲法も一緒にやれというのは随分乱暴な意見にきこえるんですけど、当時としては両学問の距離はそう遠くなかった。

田畑　「近代的」政治学とは違いますから。むしろ内容的には、国法学的な政治学が多かったでしょ。佐藤功君の父君の佐藤丑次郎博士の政治学にしましても、あるいは吉野先生なんかのノートを見ましてもそうですね。

大正末期から昭和初期の政治学のスタッフ

脇　当時、政治学関係のスタッフはどういう先生方だったんですか。

田畑　今中先生が政治学と政治学史、高木先生が政治史、外交史は京大の末広重雄先生が見えていました。いまのようにたくさんの政治関係の科目はなかったですから、あとは経済学科や法律学科と共通のものが多かったですね。

西田　中島先生は何を担当なさっておられたんですか。

田畑　政治関係では国家論です。それから法理学。いまでは法哲学と言いますが、法哲です。それと憲法です。三つ持っておられました。それと独書講読。恒藤先生は、法哲の担当ではなかったんです。国際法と何か思想史をやっておられたのではないかと思います。そのうちに恒藤先生は京大へ帰ってしまわれたんです。それに私のときには恒藤先生はフランスに留学中だったんで、だから講義は聴いていないんです。

西田　そうしますと田畑先生が学生として御在学中は、恒藤先生はここの専任ではなかったんですね。

田畑　そうです。京大の教授だったわけです。私は恒藤先生をずっと知らなかったんです。卒業してしばらくたって、憲法

をやるようになって、憲法をやるようになったということを佐々木先生が聞かれて、研究会へ出てこないかという勧誘がありまして、佐々木先生の公法研究会に参加したんです。そこに恒藤先生もおられ、それで知るようになったんです。それまでは知らないんです。恒藤先生は非常に熱心に研究会に出ておられました。恒藤先生と田村先生。私は、佐々木先生のその研究会でそれらの諸先生に鍛えられたみたいなものですね。

脇　先生は助手を何年おやりになったわけですか。

田畑　助手は四年です。それからあと講師を何年かやって、助教授になって……。

脇　講師になられますとすぐ講義もなすったわけですか。

田畑　ええ、講師になってすぐ講義を持ちました。それから助手のときに法学通論を専門学校で、助手に残った翌年の昭和三年から法学通論の講義を持ちました。それから高等商業学校でも法学通論、そして憲法。大学の講義は講師になってからです。だから五年目です。講師が何年だったか覚えていませんけれども、助教授が長いんです。十三年目にやっと教授になったわけです。これは全く紛争の結果です。

西田　そのときの学部の数は？

田畑　学部は法学部と文学部と二つです。神学部というのはなくて、文学部の一学科です。英文科、神学科というのがあるわけです。

西田　それはずっと以前からそうだったのですか。

田畑　ええ、大学ができて以来そうでしょう。その前は神学部というのが、政治経済部と並んでいたのですが、同志社大学になってからは、文学部の一学科です。

西田　それが大正九年に実現するわけですね。

田畑　そうです。その前のは、明治四十五年、専門学校令による大学です。

西田　つまり、大学とは名乗っているけれども、大学制度にのっとった正式の大学というのは……。

田畑　大学令による大学は大正九年ですね。専門学校令の方は大正五年に第一回の卒業生が出ていますが、高木先生、河原先生、それから秦孝治郎さん等は大正五年の第一回卒業です。早稲田の高田早苗氏が大隈内閣で文相になりましたね。そのときに大学令による大学の制度を用意したわけ（註＝大正七年一二月大学令公布）で、そのときからですが、同志社の場合は大正九年です。（速記者註・高田早苗氏文相就任は大正四年）

脇　昭和初期から十年代にかけて内紛が続いたんですが、ほかの学部の場合も似たり寄ったりのゴタゴタが戦前から戦中にかけてあったわけですか。

田畑　文学部にはそういうことはほとんどないですね。法学

部だけでしょ。とにかく非常にまずい騒動でした。その初めの純粋な理事会との抗争はいいと私はそう思うんです。土地にからんでの理事会のやり方に対する批判というのは、やるべきことだったと思うんですが、それが変に曲がってきたわけです。

同志社事件と野村重臣のこと

西田　さきほどの同志社事件で名前が出ました野村重臣という人はどういう人なんでしょうか。

田畑　野村君はぼくと同じクラスで、親しかった友人です。別に悪い人でも何でもないんです。

それに、野村君は、初めは社会民衆党です。安部さんの社会民衆党ができましたね。そこへ行って応援演説をやったりなんかしていたんです。彼は個人的には山本宣治さんとも懇意だったんですよ。

西田　労農運動にも興味があったわけですね。

田畑　一つは彼は陸大出身の軍人の家なんで、赤松克麿とか亀井貫一郎とかが右傾して行った時局にも影響されたんでしょう。軍人意識も出てきたのでしょう。それから、元々彼はキリスト教で、家全体がキリスト教だったんじゃないかと思います。ただ、一寸異様なところもあって、モーニングまがいの服を着て鼻眼鏡を掛けているんです。だから、「あのヤロウが……若いくせに」というようなところもあったんでしょ。（笑）

西田　私、このあいだ創立六十周年記念のときにあれは全員でしょうか、多勢の教職員が一緒に神学館前で撮影した写真を見たんです。田畑先生はまだ非常にお若いときなんですけど、その後ろのほうで野村重臣氏が写っています。でっぷり太った人ですね。

田畑　ええ、風采堂々としているんですよ。

西田　ハイカラーの服で……。

田畑　縞のズボンをはいて、キザだという感じを与える。それを見るのもいやだというひともあったでしょうね。

ただ、だんだん右翼的になっていきましてね。右翼的になったといっても、筧さんの程度ではないし、あるいは「天皇陛下万々歳」の理論の田村先生の程度までも行ってなかったかもしれません。ただ、『古事記』など古典の研究をしたり、民法ですから、日本の家族関係の勉強を始めたんです。その線からもそのように曲がっていった契機があるみたいですね。そういう程度の右に寄った論文を書いたんです。それを『同志社論叢』に載せればいいんですが。神ながらの筧さんを包擁した東大法学部のようにね。

脇　それは編集委員会がけったわけですね。

田畑　いや、松山君が編集委員になっていて、松山君は保険

論、交通論ですが。……誰かが彼の論文のことを或いは悪く言ったのかもしれませんが、よくはわかりません。

脇　われわれも気を付けないといけませんね。（笑）

田畑　それで、……湯浅先生が総長になって、学問的でない変なものを書いているやつがいるということを聞いたのでしょ。プライベートなことでもうわさがありまして……「学術、人物ともに教授たるに適せず」という理由を付けたんですから、野村君は頭にきたんでしょう。普通は「都合により」でしょ。ですから、野村君は怒ったんですね。

脇　それから上申組、被上申組ですが、被上申組で罷免された教授は……。

田畑　具島兼三郎君（政治史）と林信雄君です。林君は民法です。あとで一時、早稲田に行った人です。それから横浜高商、戦後横浜国立大学になっていますが、あそこの教授になっていますね。林君は戦後右寄りになったという噂ですが、もともと長谷部先生と懇意だった人です。だから、林君はその点も非難されたわけです。私と具島君は左翼の教授だという非難です。私のは野村君の書いたパンフレットではレーニン主義の憲法だと書いてあるんです。私の『帝国憲法逐条要義』は、初めに前論がありまして、国家論ですが、国家が消滅するという考え方をとっているんです。マルクス、エンゲルス、レーニンがそうですね。野村君はそれを知ってますから、これはマルキシズムだ、というわけです。私がその影響を受けていることは疑いないんです。そして野村君もまた影響を受けていたわけで、それは同じことなんです。しかし、同似の学説は日本の加藤弘之もドイツのグンプロヴィッツ等にもあります。ですから、野村君が無理にそう書いてみても、ほかの人には全然通じない。またレーニン主義の憲法と言ってみても、天皇の章を見ると、憲法のきめているとおり説明してあるんですから、レーニン主義でも何でもない。そして天皇については佐々木先生流に「上御一人」と書いていますから、「上御一人天皇」と書いてあるのに、なぜレーニン主義なのか。右翼の人が読んでも誰が読んでもそう思います。学界でももちろんそうです。だから無理にこういうことを書いているんだろう、と右翼の諸君も思ったに違いないと思います。

西田　河原政勝先生のことなんですが、ご夫人がスイス人ということですね。この河原さんというのはどういう経歴の人ですか。

田畑　河原先生は大正五年に高木先生なんかと一緒に政治学科を出た人です。それからアメリカに留学し、ヨーロッパにも行って、スイスの女性と結婚して帰って来られたんです。風采堂々とした善人なんで右翼でも何でもない、寧ろリベラリスト

です。学生時代は野球の名選手だったということです。

西田　専攻は国際公法ですね。

田畑　そうです。私は、国際公法の講義は河原先生に聴いたわけです。

西田　高木先生からうけられた影響と関係しますが、そのころの大学の授業のやり方として、当時、ゼミ式のクラスはあったんですか。

田畑　ゼミはないんです。ただ小人数ですから小さいクラスでしょ。政治学科といったって九人しかいないんですもの。いまの大きなゼミよりはるかに小人数でしょ。だからみんなわかるわけです。

とくに高木先生は中学に入る前から知っているんです。中学に私を無理やり連れてきたのは高木先生なんです。

徳富蘇峰について

西田　徳富蘇峰に先生が初めてお会いになったのはいつごろのことでしょうか、戦争中ですか。

田畑　いえ、戦争中は寧ろ反感を持っていましたよ。宣戦の詔勅を書いた蘇峰さんでしょう。ですから、同志社の大先輩であるけれども、どうもなじめない。だから会おうというような気持もしないですから、研究所の皆さんいらっしゃるんだけど、私は行かなかったんです。ところが、戦後のことになりますが、戦争が済んで妙に徳富先生のことが気になりました。それは、先生は初めは平和主義、平民主義で、それから変説された。…これに対する非難が非常に強いです。佐々木先生なんかもしょっちゅう非難しますから、それがあるわけですよ。

ところが、戦争が済んで、今度また変に変説されてはいかんと思ったんです。何となしにそう思ったんですよ。皇室中心主義でいいじゃないか、それで死刑になれば死刑になったでいい、変説はいけない、と思ったんです。それを言いに行ったんですよ。いわば余計なお節介です。

それは戦争が済んで二十一年に学長にさせられたでしょう。東京へ行く途中、熱海に降りまして、始めて訪ねていって、それを言いに行ったんです。ところが先生は、顔面神経痛でその時は臥っておられて会えなかった。然し、そのことが目的ですから、秘書の方に言って帰って来たんです。何か少し迷っておられるとか秘書の方が言っていました。

その後、顔面神経痛が治って、パージも解けて、同志社にいらしたときに初めて会ったんです。あれは昭和二十七年ぐらいじゃないですか。そう、二十七年の五月下旬です。

西田　それは学長をなさっていたときですか。

田畑　そうです。二度目のときです。女子大のほうの学長室

で会いました。それはいまのアドバイスのことがありまして、出会ったら最初に「あなたは益友だ」と言われました。益虫の〝益〟です。そういう意味だろうと思うんです。これが思想は非常に違う先生との出合いでした。

西田　戦争中、蘇峰は同志社へ何回か来たことがあるんですね。

田畑　戦争中は見えなかったと思います。ただ、研究所の皆さんがよくいらしたですね。それから牧野先生とか若松さんなんかはしょっちゅう行っていたようです。同志社がつぶされそうだというので、よく頼みに行かれたようです。私立大学はみなつぶすんだというようなうわさがありました。立命館、関大、等一時専門学校になったんじゃないですか。関西では同志社だけがかろうじて大学として残ったんじゃないかと思います、或いは間違っているかもしれませんが、それは徳富さんに頼みに行ってそうなったのかもしれませんね。

西田　当時、立命館は禁衛隊をやっていましたね。

田畑　立命館は禁衛隊をやっていたんです。しかしあれは教授は入ってないでしょ。学生だけですね。教授は宿直なんかもやってないんですから。……宿直をやったのは同志社だけじゃないですか。

脇　それはいつごろから始まったんですか。

湯浅八郎総長と勅語誤読事件

田畑　湯浅総長のときです。湯浅先生が御真影をもらってきて。教育勅語というのもなかったんですが、それももらってきて、式のときに教育勅語を読むということも始めたんです。しかも先生は、誤読をしてえらい目に遭った。

御名御璽というのがありますね。御璽はハンコだから言う必要がないと言うんで、「御名（ぎょめい）」を「御名（おんな）」と言ったんです。

脇　その御真影というのはどこに祭ってあったのですか。

田畑　御真影は、初めはいまの中学の時計台のところです。

西田　彰栄館ですか。

田畑　ええ、あそこの教場を一つつぶして宿直室にして、壁の所に奉安庫を造りまして、そこに納めてあったわけです。

脇　その御真影の前に寝るわけですか。

田畑　そうそう。しかしそれは閉めてありますが、「奉安庫」の反対側のベッドで寝るわけです。つまり御真影の宿直ですから。

それから後に、いまの明徳館の前、あの辺がずっと森になっていました。その森の中に「奉安殿」を造って、そこに納めてありました。

それから伊勢神宮への参拝、などということもあったようで

す。

そんなことをやる必要は然し毛頭ないのです。それで、部長になって最初に、宿直制廃止をやるべきだと思って思いきって提言したんです。

西田　最近、湯浅先生のオーラルヒストリーが本になりました（註＝『あるリベラリストの回想』）。あれをこの間読んでおりましたら、湯浅先生は意識的に、つまりレジスタンスの積りで「おんな、みしるし」と読もうとしたと言っておられます。また、そこには、御真影をなぜもらってきたかという動機は語られていませんが、「チャペル篭城事件」や「神棚事件」それに配属将校との対決という一連の出来事を経験するなかで、同志社は時局の重圧におしつぶされるのではないかという危機意識に支配されて奉安殿設置にまですすんでいったのではないでしょうか。

田畑　ちょっと違いますね。ただ、さき程言いましたような事情で右翼の攻撃を受けている。その攻撃から同志社を守るために必要だと思われたことは事実でしょう。そのための迎合です。しかし、それが逆効果になったんです。それで右翼の非難攻撃が収まったんじゃないんで、かえって激化したんです。「あいつ、あんなことやっとるけど、ウソだ」と言うわけでしょ。そして左翼の教授がおるじゃないか、マルキストがいるじゃないか、レーニン主義の憲法をやってるじゃないか、というふうに却ってなってきたのですよ。（笑）原因は其のつくった事情です。

西田　よく問題になります同志社の教育方針と教育勅語の精神が背反しないことを宣明する例の「同志社教育綱領」（一九三七年二月に発表）ですが、あれは、湯浅先生が総長のときに出されたんですね。

田畑　ええ、湯浅先生のときに、あの教育綱領を出す事になったのでしょう。然し、そうする必要はないですね。それについて、徳富さんとか日銀の総裁をしていた深井英五、そうした先輩に何か指示かセカンドをしてもらおうと思われたらしいです。それで湯浅先生の使者が徳富さんと深井さんの所へ行ったのですけれども相手にされなかったのです。徳富さんや深井さんは、そんなことはかえってマイナスだと思ったんでしょう。とにかく支持しなかった、ということです。

脇　同じ時期の関学なんかの場合はどうだったんですか。

田畑　関学なんかは問題はなく、スムースに行ってましたね。迎合もしてないでしょ。神戸女学院なんかでも院長の畠中さんが頑張っていて、迎合してないわけです。国立の学校でも私学でも、普通で行けるんです、泥仕合なんかがなければね。何か干渉されるようなことができると干渉してきます。そうした場

合でも迎合はいけない。

湯浅先生は、同志社を守るためにやったとおっしゃるんですが、あれでは守れない筈です。

伊藤　主観的にはそう思われるんでしょうけれども。

田畑　主観的には守れると思われたでしょうね。然し事実は悉く逆になった。それは当然です。

脇　牧野虎次総長はいかがでしたか。

田畑　牧野先生は非常に行政的な才幹のあった人だと思います。決してヘタはしない人です。最初から牧野先生が総長になっておれば、……大工原さんが亡くなったあと直ぐ牧野先生が総長になっておれば、ああいう不幸な騒動は決してなかったでしょう。そう思います。

西田　どういういきさつで湯浅さんが総長になられたんでしょうか。

田畑　その一つは同志社の名門の出という事です。湯浅治郎さんの令息で、蘇峰さんの甥でしょ。湯浅家というのは同志社きっての名門なんですよ。それから京大の教授だったでしょ。アメリカから帰って来た京大教授で、滝川事件のときは、京大の評議員で法学部の佐々木先生等の行動を支持して正論を主張されていた、その点は外部の評価もありました。そして大工原さんの時代に同志社の理事だった。それから、言葉は非常に美

しく、語いが豊富で、話術が巧みな方でしょう。それから美辞麗句を並べて、演説はうまいでしょ。そんなこともあって、理事会では大工原さんの後は湯浅さんが適任だと思ったんでしょうね。もちろんよくは分りません。

伊藤　上手ですね。一種の演説調で……。

田畑　「冬来たりなば春遠からじ」というような名調子ですよ。

伊藤　逆に言うとスタイルの臭みがありますけれども。

田畑　いやみな演説で歯が浮くようなという非難が当時にもありました。

脇　海老名さんよりもうまかったですか。

田畑　それは海老名先生は断然うまいです。私の聴いた雄弁の中で白眉でしょうね。

西田　それは、どういうタイプの演説なんですか。

田畑　雄大ですね。大河の流れるような、デモステネスの雄弁というのはこうした雄弁ではないかと思えるような……。

西田　海老名さんが京都を去られるときに七条のステーションに集まった多くの学生たちを泣かせたというエピソードが残っていますね。

田畑　泣きはしなかったけれども……。（笑）

脇　先生は行かれたわけですか。

田畑　ええ、私も行きました。理事会に責任を取らされて、先生は怒ってるわけですよ、同志社は理事会のものじゃない、と言ってね。教授と学生の同志社だ。……そういう演説でしたね。「諸君、健闘せよ」というわけです。

国民精神文化研究所のこと

西田　話は変わりますけど、国民精神文化研究所というのは、どのように運営がなされていたのでしょうか。たとえば、そこでは講義がなされるとか、セミナーがもたれるとか。……

田畑　どういうのか全然知りません。行けと言うアドヴァイスですが、私は行きたくないんです。いやなんだから行かない。それで、佐々木先生がちょうど東京へ来られたんで、先生に話しましたら「いっぺん行って来い。いっぺん行って、来ないからということを言ったらどうだ。はっきりするだろう」とおっしゃったんです。ある日行きまして、私が来るようになってるそうだけれども、来ませんから、ということをはっきり宣言して帰って来たんです。ただし、本をあまり持ってないから、読みたい本があったら借りに来るかもしれません、そのときはよろしく、と言って帰って来たんです。それっきりです。だから研究所の中がどうなっているかというようなことは全然わからない。玄関の事務でそう宣言して帰って来たんですから。あれへぼくが行っておれば、おそらくページになっていますね。

脇　大串兎代夫なんかが活躍したのはもっとあとですね。

田畑　かれはもっと前から活躍しています。彼は昭和七、八年ぐらいから活躍してるんじゃないですか。

脇　派遣されたのは十二年か十三年でしょ。

田畑　彼らが精神文化研究所にいたかどうかは知りません。私は東京へは行ったんです。それが十二年で、十三年の三月には帰洛しているわけです。十三年の四月に復帰することになっておって。ところがアドヴァイスどおりにしなかったためでしょう、三月に復帰できない。半年延びて、牧野総長になって十三年九月に復帰したわけです。その時分にも、大串兎代夫とか佐治謙譲というような人が活躍していたわけです。

脇　ですから、ちょうど日中事変が始まる前後ですね。

田畑　そうです。

西田　この国民精神文化研究所の理事は筧克彦なんかがやっていたんでしょうか。

伊藤　よく知らないけれども、中心にいたのは紀平正美、吉田熊次、それに文部省の伊東延吉という後に文部次官になったのが思想取り締りでは実力を持っていて……。その文部次官が所長になったようです。それが思想局方面の大変な実力官僚のようで……。

田畑　そこの所員に同志社の神学部を出た人がおったんです。河村只雄といって、アメリカの大学へ行って社会学を勉強してきた人です。PH・Dか何か学位をもっていて……。大塚先生の親しい人です。だからかれと大塚先生とが連絡をとっていたみたいです。湯浅先生は、ほかの人にはぼくをそこへやっているとおっしゃっていたようです。それで、ぼくがはたして行ってるかどうかを私立探偵を使って調べているんですよ。(笑)私立探偵が私の下宿へやってきまして、実は調べてるんだ、(笑)ところがいっこうあなたは行ってないというわけですよ。その人は、同志社のやり方はひどいですねと言って、非常にぼくに同情して言っておりました。

ぼくは行きませんよ、と湯浅先生に言っているんだけれども、湯浅先生は、〃右〃に対するジェスチャーだったんでしょう。

また機関説問題で右翼の人が来たことがあります。弾劾状というのを書いてるんですよ。それを読み上げてね。三人か四人でやってきました。時期的にこれはすこし前の事です。

西田　洛北青年同盟ですね。

田畑　洛北青年同盟も入っていましたが、それだけじゃないんです。そのもう一つ上の組織の人がいるんですよ。維新のとき河上彦斎という人がおったでしょ。「人斬り彦斎」です。その孫か何かです。かれがその右翼の大将です。やって来て話してる間に、しばらくたって何かぼくに好意を持ったようです。ほかの連中に、もう言うな言うなと抑えて帰っていきました。佐々木先生の所へも行ってるんですが、佐々木先生にも好意を持ったんです。それから京大の渡辺さんの所へ行って、これは逆に怒ってしまったらしいんです。それは戦後知ったんですけどね。

西田　渡辺宗太郎さんですね。

田畑　ええ。渡辺さんが憲法を担当されておったんです。渡辺さんは、機関説は通説だからやってるんだと言ったそうです。「通説だからやっているとは何事だ」と言っていきまいて、「お前、辞めろ！」とか言ったら、辞めると言ったんですね。それで渡辺さんは講義を辞めることになって、あとは黒田覚さんがやったんでしょ。

徳富先生の九十四歳のとき、詩碑建立記念会というのが神奈川県の二宮でございました。詩碑が二宮の塩崎邸にできまして、記念会があったんです。ぼくはそういう会へ初めて行ったんですが、大塚先生、秦さん、村田さんがいっしょでした。そこへそのときの河上君が来てるんです。その他の右翼の諸君も来てるんです。その河上君が、実はこういうことがありましたと言って、ぼくと佐々木先生には好意を持った理由を何か言っていました。とにかく好意を持ったらしいんです。よくはわからん

のですが。

西田　国士風というところでお互いに相通じたんではないでしょうか。（笑）

田畑　妙なことがあるもんですね。それから私がクビにならずに休職で助かった原因ですがね、初め湯浅さんはきろうと思っておられたらしいんです。ところが、中島憲兵中将が湯浅さんを援けに来たでしょ。その中島中将に会うようにという命令で、上申組は上申組で会い、被上申のわれわれはわれわれで会ったんです。具島君、宗藤さん、林君、私です。

ところが、中将というのは偉いですからね、皆さん礼儀正しくされているわけです。まあ、自然でしょう。私は然し、中島さんがメチャを言うもんだから、片っ端から反ばくしたんですよ。そうしたら、中島さんは逆に私に好意を持ったらしいんですね。「一人面白いヤツがおった。小さいヤツで青い顔したヤツだ。（笑）あいつは面白いヤツだから大事にせい」とか言ったんだそうです。（笑）定かには知りませんが。憲兵に助けられたわけです。湯浅さんの側近の方からの伝聞です。

キリスト教・学生時代の読書目録

脇　先生がキリスト教にお入りになったのはいつごろですか。

田畑　私は、親父がキリスト教で、幼児洗礼を受けているんです。それから中学四年か五年のときにもういっぺん洗礼を受けています。それは「信仰告白」と言うんです。そして私は、最初は神学部の予科に入ったんです。予科の二年目に心臓脚気になりまして、それがもとで肺尖カタールになって、二年半ばかり微熱が続いたんです。その間に心境が変わりまして、伝道するなんてことはとてもできない、説教するなんてことはとてもという弱気になりまして、神学部をやめて政治学科にかわったんです。

脇　ご卒業後、学究生活以外のことはお考えになりませんでしたか。

田畑　在学中別に何も考えなかったんですが、漠然と社会事業でもやろうかなという気持を持っていましたね。それは中学校を出まして神学科の予科に入る前に、留岡幸助（同志社の先輩）という社会事業家の説教を聴きましてね。私の教会へ来て説教をされたんです。そのときに説教のあとで会って、神学部に行くというような話をしましたら、牧師になるよりも、社会事業をやれと勧められたんです。その暗示みたいなものがずっと残っておったんです。ほかのことをやるという気はなかったですね。社会事業でもやろうかという漠然たる気持があったところへ、高木先生、中島先生が学校へ残れとおっしゃるので、

それに従って残ったのです。特に勉強しようという気持はなかったのですが、しかし高木先生は初めからそういうお考えがあったかもしれませんね。卒業後はもちろん学究以外のことは考えたことがありません。

脇　先生は、講義は最初政治学と憲法をなすったわけですか。

田畑　そうです。だから戦前から憲法と政治学で、それはずっと続いたわけです。

脇　先生は学生時代から、どっちかといえば左翼がかっていらしたわけですか。（笑）

田畑　左翼か何かわかりませんがね。（爆笑）私は憲法保守なんですよ。学生の左翼の団体がありますね。しかしどこにも入っていません。学生運動にはいっさいかかわりがないのですよ。ただマルキシズムの影響は大いにありましたね。第一に『コンムニスティッシェ　マニフェスト』これは熟読していますから。それから、『ピープルス　マルクス』、それからブハーリン、それから『社会の構成＝並に変革の過程』を書いた福本和夫氏、河上肇博士等々の影響です。

西田　福本イズムですね。

田畑　ええ、あれをよく読んだのですよ。だからマルキストの若干の人たちよりも私のほうがマルキシズムに詳しいと思う

ことがあるくらいです。ところが、運動は何もしてないし、そのとおりの思想ではないでしょ。ただ、歴史が進んでいって国家以上の自由の社会に変わるという唯物史観、唯物弁証法、これは正しいところがあると思うもんですから、その影響は非常に受けていたのです。

そのほかにマッキーバー等の多元的国家論と形式社会学。ことに、フイアーカントとかテンニースですが、この影響も大きいです。あるいは大正デモクラシーの吉野先生、それからリンカーンの影響は強いです。ぼくには、孟子の影響も強いんです。その前に内村鑑三・大西祝などもあります。

西田　明治の末期になりますと、実は民友社も出しているんですが、少年少女向けに、世界と日本の偉人の伝記シリーズが盛んに出ていましたが、そういう方面の本から影響はうけられましたか。

田畑　それはあまり読んでませんね。孟子は中学でも習ったし、予科でも習いました。ことに予科のときに中国文学の青木正児先生という京大の教授、この方が講師に見えていまして、孟子を習ったんです。あの影響は大きいですね。青木先生の講義というのは非常に面白かったですよ。中国の孟子とアメリカのリンカーン、それとマルクス、ことに『共産党宣言』ですね。

抵抗のバックボーンとなったもの

脇　先生の同世代に同じような教養体験をしながら、多くのインテリが雪崩を打って戦争中に転んじゃったわけですけれども、そういう状況の中で先生の抵抗の支えになったものは何でしょうか。

田畑　キリスト教でしょうかね。それからいま言いました孟子、リンカーンですね。最初これで決定されてしまっているでしょ。マルキシズムはその後ですから。だから、これが逆になっておったら逆に迷ってしまったかもしれません。そして、子供のときからキリスト教でしょ。これでいちばん決定されているんでしょうね。それと、頑愚な性格ということがあるでしょうね。それから、佐々木先生の存在です。

伊藤　先生が孟子とおっしゃる場合、たとえばどういう側面を……。

田畑　孟子の利益主義でない行き方です。仁とか義とか。王問うて曰く、「叟千里を遠しとせずして来たる。将にまた以て我国を利するところあらんとするか。孟子答えて曰く、王何ぞ必ずしも利と言わん。また仁義あるのみ」という問答がありますね。あれですよ。これはかなり強い影響だったと思います。学術会議で知った吉川幸次郎氏が、或るとき、私にあなたは孟子みたいなところがある、と言ったことがありました。

脇　私、きょう、先生の『法と政治』を持ってきたんです。けさ捜してみたら、大変申し訳ないんですが、だいぶ虫が食っていました。昭和十四年の出版ですね。

当時の公法学・憲法学者の中で先生ぐらい色目を使わなかった憲法学者は稀有だと思うんです。

田畑　いや、そうでもないですよ。佐々木先生等がおられますからね。

脇　いや、先生くらいの世代でです。もう一つ、戦後の『明治政治思想研究第一巻加藤弘之』。これも私は戦後まもなく手に入れたんですが、そのかなり前に『加藤弘之の国家思想』を書かれていますね。

田畑　ええ、加藤弘之のはこれまでに三冊ばかり出しています。

西田　先生の『加藤弘之の国家思想』のほうは昭和十二年に出ているんです、論文で。二年のちに河出から出て、一冊になってますね。

脇　丸山（真男）先生が当時それを取り上げられて……。

田畑　そうですね、紹介をしてくださっておったのを……。

脇　国家思想のほうも……。

田畑　ええ、両方ともです。それをぼくは最近まで知らなか

ったんです。一昨年ですか『戦中と戦後の間』を送っていただいて初めて知ったんです。戒能君が紹介してくれたのは知っていたんですが、丸山君のは不敏にして知らなかったんです。

伊藤　社会的憲法論の社会的というのは、先生が学生時代に講義などでしょっちゅう聴かれていたわけですか。

田畑　中島先生は、「社会的」あるいは「社会哲学的」法理学という言い方は好きでしたね。ぼくが使っているとすれば、中島先生の影響でしょう。しかし、私はあんまり使ってないでしょ。

伊藤　いま『帝国憲法逐条要義』のところの序文を見てますと……。

田畑　あれは佐々木先生と中島先生です。中島先生は私が中島先生の行き方と違うものですから、それを批判されているわけです。

野村君が私のを「レーニン主義の憲法だ」と言う場合に、中島先生のこれを引用していますがね。私のそういう傾向に気付いているのは中島先生がそうだ、と書いています。ところが、中島先生はそうは言ってないんです。ただ、普通の憲法論の行き方とは違う、「社会学的国家論の一齣」だとおっしゃっているだけです。

脇　先生が学生時代にいちばん影響を受けられたのはどんな先生方ですか。

田畑　学部の時代はやはり中島先生です。ところが中島先生の憲法論の方法にはどうも賛成ではなかったんです。非常に主観的でしょ。そして、自由法的な憲法論ですから。ところが佐々木惣一先生に師事するようになってからはもっぱら佐々木先生の影響です。あのロギッシュな憲法学の影響です。それから恒藤恭先生の影響が大きい。卒業後は佐々木先生、それから恒藤先生ですね。法とか憲法とか国家とかという問題についていちばん影響を受けたのは、佐々木先生と恒藤先生と言っていいですね、唯物史観は別としまして。

「政治概念論争」と同志社政治学

脇　蠟山政道氏の『日本における近代政治学の発達』を読んでいますと……。

田畑　政治概念論争ですか。

脇　これを見ますと、恒藤恭先生、中島重先生、今中（次麿）先生と同志社政治学の先生方のことがたくさん出てきます。政治概念論争にしても、同志社の先生方が主役みたいなものじゃないですか。

田畑　政治概念を設定する場合に国家現象を見る考え方は、中島先生がそうでしたし、今中先生がそうですし、恒藤先生が

そうです。ちょっと違うところがありますが、だいたいそうですね。そういう先生方は皆同志社でしたから、そういえばそういうことになりますね。

脇　田畑先生がこの論争に直接参加なさったのは昭和十年代に入ってからですか。

田畑　それぐらいですかね。

西田　十一年がいちばん最初ですね。

脇　この論争も大正の末から昭和十年代にかけて延々と論争が続いたわけですか。

田畑　そうですね。しかし初めのころは私はタッチしてないわけです。昭和十一年からで第二次です。

脇　その「第二次論争」というのは、直接のきっかけは慶応の潮田（江次）氏ですか。

田畑　潮田さんと戸沢（鉄彦）さんです。それと恒藤恭先生、そこへ入り込んだんです。戸沢さんのを読んでおりまして、何かすきっとしないんですね。論点がはっきりしないんです。そして攻撃が拙いですね。潮田君の場合もそうなんです。そこではっきりさせたいという気になったのです。それに、戸沢さんが私の書いたものにチャレンジしてきたという事があります。そのあとで、戦後ですけど、私と大体同意見になった戸沢さんが同志社へ来ましてね、最初はいやなヤツだと思ったと言ってました。（笑）

脇　それはそうでしょう。（笑）

田畑　その前に東大の堀（豊彦）さんが家へやって来たんです。

脇　堀先生も多少加わったわけですね。

田畑　堀さんは我々の論争に加わったのではなく、堀さんのは私は批判していません。しかし考え方は戸沢さんと一緒の集団現象説です。戸沢さんと堀さんとは懇意だったわけですよ。戸沢さんが堀さんの所へ行きまして、ぼくとの論争で困っている、と言ったらしいんです。堀さんはそのために家へわざわざやって来まして、もうやめてくれ、と言うんです。それで一時やめたんです。

ところが戸沢さんは戦後になって、だいたい私と同じような考えになりました。それがやっぱり正しいということを告白していました。私のこともよく理解されたようでした。

西田　かつて、熊本大学の山内（一男）さんが概念論争を取り上げておられましたね。

田畑　そうでしたね。

西田　あれは山内氏の観点に立って論争史を整理したものという印象をもちましたが……。

田畑　そう、何かうまくまとめていますね。

西田　あの論文（註＝「政治概念論争」政治学講座Ⅰ『政治

原理(上)』所収一九五五年)で触れられていたと思いますが、「国家現象説」と「集団現象説」の両派の局外に立つものにとっては、問題の自由なうけとめ方や批判をおこなう余地が多分に残されているのであって、長い論争を通じて展開された諸見解を、自由な角度からアプローチして、問題点を整理する作業の必要性が、今日指摘されて然るべきであろうと思われるんです。私などまさに「局外に立つ」後進の一介の政治学徒として、あの論争の過程をフォローしてみますと(もちろんまだ瞥見にすぎませんが)、いくつかの論点で両派の触れ合う面があるのに、論争が進展していくにつれて、一部の論争参加者などは感情的になってしまって、本筋からそれた枝葉の部分で過熱化している現象にぶつかります。

論争のもつ本来的性格からいって、ある程度、そういう傾向を回避することは困難なのかも知れませんが、折角、「新しい問題の提起や課題の示唆」があったにもかかわらず、十数年も続けられた学界の論争にしては、最後の段階で十分論点が整理されないで終っているために、尻切れトンボのようになってしまって、あの「政治概念論争」と戦後のわが国の政治学界における知的営為とのつながりがプツンと切れてしまっている感じがして仕方がないんです。

田畑　それは、一つは堀さんなんかの要請もありまして、ぼくがやめたということもありますね。もっと続けてやれば早くはっきりしたのかもしれませんが、やめたんです。病気になられては困ると思いまして。

もう一つは、吉富君等がこうでもない、ああでもない、ということを言いだしたでしょ。それもあります。その両方じゃないですか。

西田　当時、マルキストの人々は、論争に参加するしないは別として、だいたい国家現象説をセカンドしていたようですね。前芝確三さんからそういう話を聞きました。

田畑　そうでしょ。レーニンもそうですし、マルクスもそうです。だから戸沢さんが戦後変わったというのは……。

西田　マルキストになられたから……。

田畑　そう、一つはそのためでしょうね。

脇　戸沢さんとマルキシズムとの元々の関係というのは…。

田畑　戦後になって、急激にそうなりましたね。

脇　戦後京城から帰ってからですか。

田畑　そうです。引き揚げてからの話です。すっかりそうなりましたね。戸沢さんがそういうふうに変わったのは、戦争の結果かもしれませんが、論争の反省もあったのでしょう。それは見事に変わりましたね。

脇　政治学理論にかかわりながら日本の近代政治史・明治

憲政史にもタッチした人に鈴木安蔵氏もいるわけですが、その点で先生とかなりパラレルな面もあるんじゃないかと思うんですが……。

田畑　鈴木君はマルキストですね。私自身は、マルキシズムの影響は非常に受けているという程度であって、マルキストということは言えない。そう言えばマルキストに対して相済まんでしょう。（笑）

脇　そうですね、鈴木安蔵氏も河上さんのお弟子さんでしたね。

田畑　そうです。河上先生の弟子であって、河上先生から好かれてないみたいですが、あれは何か不思議ですね。

脇　ええ、『自叙伝』を見るといろんなことが書いてありますね。

田畑　そうです。憲法論では、鈴木君は私にかなり近い所もあります。佐々木先生によっているところがかなりありますから、そういう関係でしょうか。不徹底ですけどね。マルキシズムとしても徹底はしてないでしょうね。法律をやっている人で非常にはっきりしている人は平野義太郎さんではないかと思います。平野さんは非常にシャープで、非常にシュアーです。鈴木君は比較的に言ってそうじゃない……。それから名古屋の長谷川正安君、彼も平野さん程にははっきりはしていないですね。

脇　まあそれは戦後のマルキシズムですけどね。

田畑　あんまりよくわかってないなと言ったことがあるんですがね。（笑）それから東大の渡辺洋三君、彼もマルキシズムだという事ですが、弁証法がわかっていない、みたいですね。「三つの憲法」説には驚きました。

脇　渡辺氏は川島法社会学とマルキシズムなんでしょうね。

田畑　それから、影山日出弥君。この人は若い人に人気がありますね。

西田　早稲田の人ですか。

田畑　早稲田ではないでしょう。仲々の理論家ですが、惜しくも早逝しました。

日本憲法学史の研究

西田　戦争中に帝国憲法草案の研究ということに関連して、先生はずいぶん日本憲法学史のお仕事をしておられるんですが、さっき脇先生がおっしゃったことでちょっと思いついたんですけれど、ほぼ同じ時期に鈴木安蔵氏が日本憲法学史の研究をしておられますね。たとえば、植木枝盛の研究なんかは非常に早い。時期的にはたしか、家永さんの仕事よりも早いですね。鈴木安蔵氏の仕事は意識なさいましたか。

田畑　ええ、鈴木君のあの研究に刺激されましたね、憲法学

史の研究は。それは非常にあります。彼が先輩です。

西田　当時ほかにはあまりないですね。

田畑　ほかにあまりありません。刺激されて、鈴木君のは十分でない点があるという気持を持っておりました。ですから別にやらなくてはいけないというような気持になりました。然し、私のはそう克明にやっていないんで、極めて不十分です。それに私のは保守主義の人たちの研究に終始していて、植木枝盛等左派の人たちには及んでいません。これからやろうと思っているところへ、戦争が済んで事務をやらされたでしょ。研究の方は、それですっかりだめになったんです。憲法学史や政治思想史の研究は、もうあとはやれないですよ。それまでのが不十分であって、不十分なところを十分なものにしようと思っているところへ事務をやったら、これはもうだめですね。

西田　私が大学に入ったころに、先生の『憲法学原論』が刊行され始めたんです。（註＝『改訂憲法学原論』（全）一九五七年刊行）『憲法学原論』は日本憲法学史の部分の占める比重が他の憲法学の類書と比較してみて随分大きいと言えましょうね。

田畑　大きいですね。あれをもっと深くやりたいと思っていたんです。

西田　関書院の明治政治思想研究シリーズはどうなったんでしょうか。『加藤弘之』が出たあとは出てないですね。

田畑　出てないです。

西田　発刊の予告は出ていますけれど。

田畑　つぶれたんですよ。

脇　あの本屋はすぐつぶれたんじゃないですか。

田畑　そうです。

脇　いまでも思い出すんですが、関書院は戦後の焼け跡時代に社会学関係の本をずいぶん出していますね。

田畑　かれはもともと社会学者なんですね。たまたまそういう紙を持っていたんですね、非常に悪い紙ですけどね。

脇　先生の御本の定価も二十五円となっています。（笑）

田畑　隔世の感があります。

伊藤　田中惣五郎氏が戦時中にずいぶん伝記なんかを出していますね。ああいうのは同時代としてどういうものなのですか。

田畑　田中さんには、ぼくは一度も出会ったことがないですね。鈴木君とは懇意な人でしょ。何かの研究会で一度ぐらい会ったかもしれませんけれども、よく覚えていません。

脇　日本憲法史とか憲政史には、古くは尾佐竹猛もいますし、吉野作造もいますね。先生が、憲法史、憲政史の御研究でいちばん刺激を受けられたのはどういう人ですか。

田畑　尾佐竹さんでしょうね。やはり尾佐竹さんがグループ

の中心だったんじゃないですか。それから吉野先生。鈴木君はそこへ入っていった。それから伊東巳代治の孫で伊東治正という人がいました。いまはどうされてますかね。そのときは伊東伯爵です。「伊東家文書」を研究者に提供してくれまして、彼を中心の研究会もありました。東京でやったり、京都でやったり……。美濃部先生もそこへ出て来られて、そのとき初めて美濃部先生を知ったんですが。先生はその時も一パイ飲んできておられるんですね。

脇　何しろお酒好きですからね。

田畑　その東京での研究会は華族会館でありました。

戦時下の日本の憲法学

脇　戦争中の日本憲法学の行き方をいまになってどういうふうにお考えになりますか。

田畑　だいたい二つに分けることができるでしょうね。一つは佐々木先生、われわれの行き方――立憲主義です。もう一つは、ナチズムの影響を受けた人たちや国粋主義の人たちですよ。その二つではないでしょうか。……大きくは。

脇　宮沢さんなんかの憲法学について、戦争中、先生はどういうふうにお考えになっていましたか。

田畑　宮沢さんは明治憲法を避けておったのではないかという感じがします。あなたは講義は宮沢さんですか。

脇　ええ、戦争中の宮沢さんに習いました。

田畑　天皇論をやらないでしょ。

脇　ええ、そこは飛ばしてやったわけですけどね。ぼくは昭和十八年の秋に大学へ入りまして、一緒に入学した学生の大部分が学徒出陣ですぐ入隊し、年が足りなかった私たちごく少人数で戦争末期の法学部を経験しましたが、兵隊に入る前の一年間に聴いた講義の中で今でもいちばん印象的なのは、やっぱり宮沢さんの講義です。

たとえば東条英機が首相兼陸相兼参謀総長になったことがありましたね。海軍は島田繁太郎で……。たまたま憲法の講義の日、東条首相が陸相として陸軍省へ登庁する写真と、金モールの参謀肩章をつけて明治神宮に参拝する写真とが並べて新聞に出たことがあるんです。そのことを、皮肉たっぷりに話されたのがいまだに忘れられません。

田畑先生とはタイプが全然違いますけれども、とってもアイロニックでメランコリックな講義でした。宮沢先生御自身大変不愉快で皮肉を言っておられるのが、こちらにもピンピン伝わって……。便乗らしい発言は一言もありませんでした。私は小野清一郎氏に刑法を習いましたけど、中身は滝川（幸辰）さんと刑法学説としては大体同じなんですが……。

上田　系統的には同じで、どちらも客観主義刑法学説だから。

脇　だから小野清一郎の刑法総論の骨格は応報刑論の客観主義で大変バタくさいんです。ところが章の締めくくりの所に必ず二、三行、例の「日本法理」の展開が出てくる。つまり、そこで話が、聖徳太子の十七条の憲法になってしまうのです。

上田　小野先生と滝川先生と比較する場合、主観主義刑法学に対する意味では確かに客観主義ですけれども、その中身から言えば、一方では道義的客観主義、国家的客観主義、他方では自由主義的客観主義という点で全然対立するものがありますね。

田畑　ぼくは宮沢さんのあの態度は偉いと思いますよ。つまり帝国憲法忌避の点なんです。天皇論をやらないんだから徹底していますね。本も書かなかったでしょ。

脇　宮沢さんはシニックで屈折したところがありますが、最低限の線だけは守った人ですね。

田畑　横田喜三郎氏なんかもそうでしょうね。あの二人は徹底して天皇ぎらいです。

脇　だからあの時代、ダンスをしたり、麻雀をやったりしとったわけですわ。(笑)

田畑　ところが、私は天皇ぎらいじゃないんです。

脇　それはそうでしょう。(笑)それはわかりますよ。

田畑　だからリパブリカンじゃないんです。天皇制であろうが何であろうがいいという考えがあります。結局は共和制になる、然し君主政を特に目の敵にするという気はない。大事なことは人権強調だということなんです。共和制であったって、人権無視では困るわけです。横田さんなんかは、共和制論者であるけれども、人権主義ではないんですね。

脇　横田氏も、戦争直後はそれは徹底したリパブリカンでした。それがのちに最高裁の長官になろうとは……。

田畑　宮沢さんの場合も、天皇ぎらいはまあいいんだとしても、人権主義徹底ではないですね。しかし美濃部さんも私も人権主義なんです。その点が非常にちがうんです。

伊藤　陸羯南の考え方がそうですね。

田畑　人権主義は佐々木先生がそうなんです。いまの天皇制を変えてもいい、変えることもできる、然し天皇尊重という考えです。そこが、美濃部さんは違うんです。美濃部さんは天皇制を変えてはいけないという考えです。これは天皇ぎらいではないというのではなくて、天皇好きなんです。佐々木先生も天皇好きではあるけれども、天皇制を改正できる、改正しなきゃならんという考え方もあるんです。

私は佐々木先生にならっていると言えばならっているんですが、ならっている前にそういうような考え方が始めからあると言ったほうがいいかもしれません。とにかく、国家形態にこだ

わらないんですよ。

たとえばイギリスが君主制であって人権主義で非常にうまくいっている。スウェーデンが君主制であって人権を大切にしてうまくいっている。あれを見直す必要があるんじゃないかというような気持です。そういう点が、いまの若い憲法学をやっている人からは、私を反動とか保守的であるとかいうことになるんでしょう。（笑）しかし、これは気持の問題、というよりも、国家であるかぎり国家権力の形態はちがっても、すべて同じだという権力についての「政治学」の考えなんです。

佐々木憲法学について

西田　佐々木先生は羯南のものを読んでおられたんでしょうか。

田畑　ええ、やはり読んでいらしたでしょうけれども、じかに羯南の引用はされていません、どういうわけか。私、じかに聞いたことはないんですけど、磯崎君とか盛君によりますと読んでおられたそうです。

西田　『立憲非立憲』（一九一八〈大正七〉年）は大正デモクラシーの論調としても水準が高いものですね。吉野さんとも交流がありますね。外国でお会いになっておられる。

田畑　吉野さんと非常に親しいんです。そして吉野さんを尊敬されてましたね。いちばん尊敬されておったのは吉野さんじゃないですか。不思議なくらいでしたよ。一方は吉野先生、他方は河上さんでしたね。河上さんはコンミュニストでしょ。先生はコンミュニストじゃないけれども、河上さんとはとてもじっこんであるし、いつも弁護をされるし、共産党の悪口を言う人があると、何か先生は弁解されていましたね。悪口を言ってはいかんと言われました。

脇　それにしても、佐々木門下の最左翼の田畑先生として、戦後における佐々木学派の分極化をどういうふうにごらんになりますか。

田畑　中村哲君によれば、大石君は佐々木右派なんです。然し大石君のは佐々木憲法学と非常にちがってきましたね。これは全く意外です。私のは野村君から見れば、レーニン憲法ですが、（笑）やはり本質的に言って佐々木憲法学です。中村君は私を佐々木左派と言っていますが、分化は自然でしょう。

脇　西の佐々木に対する東の美濃部スクールの場合には、こんな分化はないと思うんですけれども、佐々木スクールの場合はどうしてこんなふうになるんですか。

田畑　大石君は、明治憲法時代はあんなじゃなかったですよ。硬骨のリベラリストでしたね。戦後にわかにああなりました。突変みたいなもんですよ。佐々木先生自身もあれは理解できな

かったんじゃないでしょうか。大石君がああいうふうに右旋回したのは。ですから、大石君を見て、佐々木憲法学はああだと言う人が多いんですが、しかしそうじゃないんです。美濃部学派も美濃部先生とは同じではなく、様々ですよ。

西田　いちばん佐々木学説に近い人といえばどういう方になるんですか。学説上ですが。

田畑　磯崎辰五郎氏、かれは典型的でしょうね。ほとんど佐々木先生そっくりです。それからそれに近いのは盛秀雄君です。盛君のは、近いけれどもかなりまた違っています。まあ磯崎氏でしょう。そっくりと言ってもいいぐらいですね。多少、佐々木先生の説を間違えて受け取っているんじゃないかと思うこともありますけれども、だいたいにおいて同じです。努力して少しも違わんように、という行き方をされているんじゃないかと思います。――然し、田畑君のはちょっと違ってるなあと言ってるそうですよ。（笑）

西田　しかし佐々木スクールというのは大変裾野が広いわけでして、前に大阪大学におられた森義宣さんもそうですね。

田畑　森義宣君は佐々木先生の研究会にいましたけれども、政治学史でしょ。彼は専攻は憲法ではないんです。だから特に佐々木先生の影響を受けているとか、佐々木学説を継承しているとかということはないんです。〝右〟ということになりますと、大石君のほかに吉田一枝という人がいるでしょ。あの方はまあ佐々木右派です。それから中谷敬寿君。また、東京学派に近い原龍之助、俵静夫の両君がいます。

西田　関西学院におられた方ですね。

田畑　吉田・中谷の御二人とも関大です。吉田さんの家も神主さんという事を聞きました。

戦前の東大法学部

田畑　戦前の東大の法学部でぼくが感心していることは、宮沢さん、横田さん、田中耕太郎、南原さんという人があって、一方、筧さんという方がいるでしょ。上杉さんもおりましたね。ところが論争は別として、中で争ってないんですね。あれで、東大法学部は戦前戦中も全然被害を受けなかったんです。あの筧さんと宮沢さんというのはえらい違いですからね。一方は天皇様様でしょ。一方は天皇ぎらいでしょ。

脇　その上杉慎吉と美濃部さんにしてみたところで、学説はあんなに違いながら、けっこう個人的には仲良しだったそうですね。

その点、戦時下の東大では法学部がいちばんしっかりしていたと思います。だらしがないのは経済学部ですね。

田畑　ええ、東大経済学部は戦前の同志社の法学部と同程度

にメチャでしたね。それで最後に平野粛学があったわけですね。その点、東大法学部に学ばなければならんという気持は強いですね。

脇　たしかに戦中と戦後の断絶をほとんど感じさせませんでした。兵隊に行く前と戦後帰ってきてからと教室の雰囲気、講義内容が全く同じなんです。

田畑　特に戦争中は、法学部長は南原さんでしょ。

脇　そうでした、戦後復学してみたら。

田畑　南原さんは行政職に適している人ですね。それから議長ぶりというのは素晴らしいと思います。政治学会なんかのとき、さっさと切っていくんです、歯切れがよくてね。あと今中先生が理事長になって、政治学会理事会の議長をやるんですが、南原さんとくらべて随分調子が違いましたね。

脇　そうですか。

同志社・早稲田・慶応

田畑　今中先生を同志社の学長に迎えようと思ったことがあるんですよ、私は早く辞めてね。恒藤恭先生に相談しましたら、「阿部君がいいですよ」というのです。早稲田の阿部賢一氏。南原さんと阿部さんは切れる点似たところがあるんです。やはり行政には向いている人だったんでしょうね。一時大浜信泉さんの後をやりまして、紛争をうまく解決しましたね。ところがいろんな事情がありまして、同志社へ来てもらうことができなかったんです。矢内原（忠）さんを考えたこともありました。然し、そのうちに湯浅さんが帰って来ましたから湯浅さんがなったわけです。

西田　阿部先生は大正期にここの法学部の教授だったんですか。

田畑　ええ大正期ですね。同志社の中学を出て、大学は早稲田へ行ってるんです。それから同志社へ来られて財政学を担当されたんです。そしてまた早稲田へ帰ったわけです。

脇　早稲田と同志社というのは、慶応よりも関係が深かったようですね。

田畑　ええ。何か親しい感情がありますね。それは同志社の先輩が昔かなり早稲田の教授になったんですね。安部磯雄先生、浮田和民先生もそうです。それで、早稲田の方たちが同志社に対して特別の気持を持っているようです。慶応は然しそうじゃないようです。同志社の先輩は行っていませんから。

西田　滝本誠一は慶応ですか。

田畑　ええ、滝本さんは慶応ですけれども、徳富さん関係で、徳富さんが引っ張ってきたんでしょう。慶応へは同志社の人は行っていないんです。

同志社はしかし東大から来た方が多いですね。殊にわれわれの学生時代は東大ですよ。中島先生、今中先生、林先生、住谷先生、刑法の山本亀市先生、経済史の石田秀一郎先生、刑法の河野密先生、財政学の和田武先生等、非常に多かったですよ。

脇　櫛田民蔵はもっと前になるんですか。

田畑　少し前ですね。私の中学の頃でしょう。

伊藤　新人会から流れてきたのがありますね。

田畑　そうですね、海老名先生関係ですね。原田先生から海老名先生の時代にかけてです。

西田　今日は主として昭和二年から終戦の時点までのお話を伺ったわけですが、法学部の歴史ということになりますと、戦前、戦中の問題とともに、当然、戦後の第二期法学部長と大学長時代についてまた先生にお話を伺わなければならないと思います。長時間どうもありがとうございました。

（第一回終了）